

エジプト現代史におけるムスリム同胞団

現在、地球規模において最も注目されている思想・政治運動の一つは、言うまでもなく「イスラーム復興運動」である。そのため、これまでに、なぜイスラームが現在に至るもかかる生命力を持ち得ているのかについて、一方ではイスラームのイデオロギー上の諸特徴が、他方では現代社会の政治・経済・社会危機の諸相が、その原因として挙げられ、さまざまに解説されてきた。かくして、我々の「イスラーム復興運動」に関する知識は確実に増大した。

しかし、この知識の増大は、それに見合う形での、この運動に関する我々の理解の深化、とりわけ、その将来的可能性と限界をも射程に収めたうえで現代史上におけるこの運動の意味に関する理解の深化をもたらしたであろうか。その答えは、少なくとも我が国の事情をみる限り、否定的たらざるを得ない。そして、その理由の一つは、疑いもなく、これまでこの運動に対してさまざまな視角から問題提起がなされてきたにもかかわらず、以下の素朴な疑問、つまり、現代においてなぜイスラーム運動でなければならぬのか、という「イスラーム復興運動」の歴史的被拘束性に関する疑問に対して十分な討議がなされてこなかったことである。

もっとも、ここで問題となっているのは、イスラームの思想体系、世界認識、歴史観の歴史的被拘束性ではない。これらが、その成立に際して被った拘束性はともかく、その後いわばイスラームの原点・象徴として繰り返し歴史の場に現われ、ムスリムの運動を活性化してきたことは周知の事実であ

る。そうではなくて、ここで問題とすべきは、「イスラーム復興運動」の主体たるムスリムの歴史的被拘束性、換言すれば、この運動の主体たるムスリムが複数の階層あるいは階級から構成され、かかる階層あるいは階級をそれぞれ拘束している複数の社会的・文化的状況に依存してしか上記イスラームの原点・象徴が現われざるを得ない、という歴史環境である。

つまり、ここで我々が直面しているのは一つのイスラーム現象であるが、そこでのイスラームは、もはや「多様性のなかの統一」などという思弁のなかで表現されるような思想体系ではなく、例えば、「エリートイスラーム」対「大衆イスラーム」、「理念体系としてのイスラーム」対「生活体験としてのイスラーム」、「自覚されたイスラーム」対「意識下に埋没したイスラーム」など、認識論的あるいは存在論的に次元を異にする複数のイスラーム的なるものから構成される、政治過程のなかでの一つの運動なのである。とりわけこの現象で注目すべきは、自覚的にイスラーム的価値観を意識した民衆あるいは大衆が政治勢力として大きな役割を果たしているという事実である。

かくして、我々は、この現象を理解するための大前提として、曖昧模糊とした歴史的運動主体である「民衆」あるいは「大衆」の性格をめぐってさまざまな局面・視点から考察を加えなければならない。「イスラーム復興運動」研究が学際的研究たらざるをえない所以である。そして、本稿が扱うムスリム同胞団こそ、かかる複雑な「現代的」イスラーム現象の先駆であるとともに、その典型であると考えられる。そこで、以下、上述した如くに理解されたムスリム同胞団現象の歴史的被拘束性について、簡単に言及してみよう。

ある現象の歴史的被拘束性を問うことは、一面では、その一回性、つまり固有性を問題にすることであるが、他面では、それを歴史の流れのなかで相対化する試みでもある。ムスリム同胞団現象についてもまた、その特殊性と

一般性とをバランスよく考察しなければならない。

ところで、先に私は、ムスリム同胞団現象の特徴として、それが民衆によるイスラーム政治運動である点を指摘した。しかし、この指摘を、文字通りに、つまり、ムスリム同胞団現象はイスラーム世界——ここでは具体的にはエジプトを指す——における最初の民衆によるイスラーム政治運動であると解釈するならば、それは全くの誤りである。話を近代以前——ここでは便宜的に1798年のナポレオンのエジプト遠征をもって近代の開始とする——に限ってみても、周知の如く、イスラームのイデオロギー上の特徴から、イスラーム世界のほとんどすべてのムスリムの政治運動はイスラーム的であった。また、その厳密な定義はともかく、民衆運動についても、近年注目をあびている運動を挙げるだけでも、例えば「フトウツ」 「アイヤールーン」、 「アフダース」 などという名で呼ばれた都市任侠集団の運動などが知られている。¹¹

さらに、この点に関して強調すべきは、前近代イスラーム世界について、特定のムスリムの運動を取りあげ、それがイスラーム的であるか否かを云々することの無益さである。例えば、上述した都市任侠集団についても、彼らの直接の目的が何であれ、彼らは自らの行動を公正、不正を核としたイスラーム的価値体系で正当化している以上、彼らの運動をイスラーム的と称しても何ら不都合は生じない。つまり、極言するならば、イスラームがいわば体制化している前近代イスラーム世界においては、いかなるムスリムの運動もイスラーム的たらざるを得なかったであろう。従って、そこで表明されるイデオロギーの差異も、結局のところ、当の運動が誰を敵対者としていたのか、それは異教徒であったのか、対立イスラーム・セクトであったのか、あるいは不正統治者、富裕商人であったのか、等々に基づく表現の違いにしかすぎなかったといえる。

それでは、かかる前近代イスラーム民衆運動と、ムスリム同胞団に象徴さ

れる近現代イスラーム民衆運動との間にあるのは、ただ単なる規模の違いだけなのであろうか。決してそうではないだろう。我々は、両者の間に決定的な質的違いを観察することができる。しかし、この点を論じることは、とりもなおさず「近代」という時代の歴史環境の特異性を俎上にのせることにほかならず、本稿のような場で、それを行うことはできない。ただし、この点に関連して、以下のことだけは強調しておきたいと思う。つまり、それは、上述した両者の質的違いが観察されるようになるのは19世紀も後半になってからであるということ、換言すれば、この両者の質的違いは近代におけるエジプト社会の一定程度の変容を待って初めて顕在化したということである。

確かに、我々は、19世紀前半・中葉において、ムハンマド・アリーのエジプト総督就任への道を開いたオマル・マクラムを指導者としたカイロ蜂起²⁾、マフディーを僭称する人物をかついだ上エジプト地方の農民反乱³⁾など、少なからぬイスラーム民衆運動を確認することができる。また、それらの幾つかは、明らかに、後の現代イスラーム民衆運動の先触れとしての性格をもっていた。例えば、前記オマル・マクラムのカイロ蜂起は近代エジプト最初の反西欧民衆運動として⁴⁾、また、上エジプト地方の農民反乱は伝統的経済基盤を外国商品の流通によって脅かされた民衆の反発として⁵⁾、つまりは、ともに世界資本主義との邂逅に直面したエジプト民衆の反応として位置づけられ得るであろう。

しかし、この点を余りにも強調しすぎると、歴史を逆立ちさせることになりかねない。というのも、これら19世紀前半・中葉のイスラーム民衆運動に上述した如き現代史的な性格を確認できるとしても、それらは、その規模、そしてとりわけその運動主体の自らの状況を自覚するあり様からして、基本的には前近代イスラーム民衆運動にとどまっていたと判断されるからである。つまり、たとえ世界資本主義が人類の歴史において類例をみない特異な現象であり、その後のエジプト史に決定的で不可逆的な影響を与えたとしても、「民衆」は、少なくともそれとの邂逅当初にあっては、世界資本主義の客観

的深刻さを自覚していたわけではなく、それまでの歴史において繰り返されてきたように、従来の生活基盤の動揺を前に、体制化され、それ故意識下に埋没している価値観に基づいて行動を起こしたにすぎないと考えられるからである。

換言すれば、前近代イスラーム民衆運動が現代イスラーム民衆運動へと質的転換をとげるためには、現在生じつつある生活基盤の動揺がそれまでの歴史においてみられたものとは量的にも質的にも異なる抜き差しならぬ動揺である、という危機感を背景に、運動主体が自らの状況を体制との係りのなかで自覚化・意識化させなければならなかった、ということである。かくして我々は、ここにおいて、「民族」と「階級」という古くて新しい問題に直面することになる。というのも、上記「民衆」運動の質的転換過程はいわゆるエジプト「民族」意識の形成過程にほかならないが、当時の生活基盤の動揺を危機と意識する次元は「階層・階級」によって異なり、それ故、エジプト「民族」意識の形成過程も「階層・階級」によって一律ではなかったからである。しかし、ともかく、それまでの上記「民衆」運動の質的転換過程の帰結であるとともに、その後のこの過程を推進させる原因ともなった事件こそ、疑いもなく、オラービー運動（1879-82年）であった。

この運動については、今後さらに多くのこと、とりわけ組織面について解明される必要がある。しかし、現時点においても、その歴史的意義については、以下の如く、その評価が定まりつつある。つまり、その評価とは、この運動が評者によって「近代化」過程とも「従属化」過程とも称される19世紀エジプト社会の変容過程の一つの帰結であり、それ故、従来のイスラーム的政治体制ではない、いわゆる近代的「民族」国家体制の枠組のなかで展開された、エジプト最初の「民族」運動であった、というものである。⁶¹

かくして、外債の累積によるエジプト財政の破産に端を発した政情不安のなかで生じたこの「民族」運動は、当時の複雑な国際環境とエジプト社会の

変容を反映して、軍人、ウラマー、商人、大地主、村落有力者、さらには一般都市・農村住民など社会各層を巻き込んだ幅広い国民運動として展開され、その結果、そこで表明された思想も、ラディカルな共和主義、穏健な立憲主義、パン・イスラミズム、パン・アラビズムと多様であり、その運動としての性格も、反西欧、反オスマン朝、反ムハンマド・アリー朝などさまざまな側面をもっていた。そのため、この運動の歴史的評価を下すについては慎重にならざるをえないが、この点について、本稿でのテーマと関係する限りで指稿すべきは以下の二点である。

第一は、この運動には上述した如き多様な社会各層が参加し、そこではさまざまな思想が表明されたにもかかわらず、この運動の組織体に関する限り、我々に知られているのは軍人を中心に結成されたワタン（祖国）党のみである、という点である。また第二は、この運動においてイスラーム的要素はその基本思潮の一つを構成していたものの、それはいたずらに狂信的な宗教感情をかきたてる体のものではなく、きわめて啓蒙主義的であり、他の思潮と対立するような要素ではなかった、という点である。そして、この二点から引き出される結論の一つは、当時のエジプト社会の変容がいわゆる「民衆」の伝統的価値体系にゆさぶりをかける程には根本的なものではなかったこと、それ故、いまだイスラーム的要素は「民衆」を基盤とした一つの独立した政治運動を生み出すまでには至っていなかったことである。

ところで、このオラービー運動は、結果的には、軍人の武力蜂起とそれを口実に武力介入したイギリス軍のエジプト単独軍事占領をもって終わったが、今度はこの挫折がその後のエジプト政治運動史における出発点となった。というのも、イギリス当局といういわば目にみえる敵の存在によって、以後のエジプト民族主義運動は反英を中心とした反西欧という基本軸をめぐって展開し、国内各政治勢力もこの基本軸を基準に位置づけられていくことになるからである。と同時に、このイギリス占領時代は、エジプト経済が商品作物綿花の栽培に特化したモノカルチャー型構造を完成させるに至った時期にあ

たり、かかる社会経済構造の進展を背景にして、社会階層上における以下の二つの顕著な現象がみられた。

第一は、ジャーナリスト、弁護士、学生などの都市知識人の台頭と、彼らによる政党の萌芽形態としての小イデオロギー集団の組織化である。また第二は、モノカルチャー型経済を担った地主層の、都市に拠点をもつ不在大地主層と農村に拠点をもつ農村中間階層とへの階層分化である。そして、オラービー運動後、エジプト民族運動において第二の画期となった1919年革命を担った中心は、この都市知識人と二つの地主階層であった。⁷⁾かくて、1919年革命には、その規模の圧倒的広がりとは別に、その質的側面においても、オラービー運動と比べて以下の三点の如き特徴がみられた。

第一は、オラービー運動が反西欧、反オスマン朝、反ムハンマド・アリー朝などさまざまな側面をもっていたのに対して、この政治運動は、はっきりと反英闘争という形で展開された、という点である。なお、この点に関しては、第一次世界大戦後におけるオスマン朝の崩壊と、それまでに進行していたムハンマド・アリー朝のエジプト土着化という事実を忘れてはならないだろう。

また第二は、オラービー運動においては、表明された思想の多様さとは対照的に、運動の組織化に未成熟さがみられたのに対して、この政治運動を指導したのは、都市知識人が組織した政党の萌芽形態としての小イデオロギー集団であり、これら組織体はリーダーたちの出自・経歴から、都市住民のみならず農村住民の間にもその人的ネットワークをもっていた、という点である。なお、この点に関しては、当時のエジプト社会における近代的教育制度の普及と、それに対する評価は別として、政党を中心とした西欧の政治制度、政治理念の浸透を忘れてはならないだろう。

そして第三は、オラービー運動において、その後一貫してエジプト民族運動のスローガンとなる「エジプト人のためのエジプト」なる標語が初めて唱えられたが、当時においては、そこにみられる「エジプト人」なる概念は実

体の定かならぬ情緒的なものにとどまっていたのに対して、1919年革命時点においては、この「エジプト人」の定義の問題が、例えば「ムスリム」、「コプト」間の政策合意に象徴されるように、ただ単なる理念表明の域にとどまることなく、具体的運動方針、政策決定の場で討議されるようになった、という点である。この点は上記二点に勝って重要である。というのも、そこには、その後の両大戦間期におけるエジプト社会を特徴づけた以下の如き顕著な現象を指摘できるからである。

つまり、この現象とは、一言で述べれば、「エジプト人」としての自覚をもつ「大衆」の政治舞台への登場であるが、この「大衆」は、当時進行していた都市部、農村部における階層分化と並行する形で表面化したアイデンティティー危機を背景に、さまざまな政治思潮のただ中で、明確な組織目的・原理をもたないまま、それ故、それらの境界は曖昧のまま、あるいはイデオロギー集団として、あるいは利益集団として、さらにはエスニスティック集団として組織されていく。そして、ここに至って、我々は、政治思潮の一つとしてのイスラームに直面することになるが、このイスラームは、思想体系としてのイスラームとは認識論的あるいは存在論的次元を異にし、それまでの政治の表舞台からは隠されていたもう一つのイスラーム的なもの、つまり、「エリートイスラーム」に対する「大衆イスラーム」、「理念体系としてのイスラーム」に対する「生活体験としてのイスラーム」、「自覚されたイスラーム」に対する「意識下に埋没したイスラーム」、つまり一言でいえば、「思想としてのイスラーム」に対する「感情としてのイスラーム」であり、それを体系化し、組織した政治主体こそ、ムスリム同胞団であった。

ところで、このイスラーム感情は、非イスラーム的な価値体系や政治理念とは一切相容れない性格のものなのであろうか、あるいは、もし歴史環境がそれを許しさえすれば、それらと共存し得る、さらには、あえて挑発的表現を使えば、克服され得る性格のものなのであろうか。我々は、このどちらの

見解をとるかによって、両大戦間期のムスリム同胞団現象と現代における「イスラーム復興運動」とに対して、全く相反する評価を下すことになるだろう。とはいえ、かかる価値判断の正邪を云々することは歴史研究のらち外にある。そこで、以下、ムスリム同胞団現象の歴史環境を理解する一手段として、それと現代の「イスラーム復興運動」の歴史環境との間の類似性を指摘することによって、この拙い小稿を終えたいと思う。というのも、我々が「イスラーム復興運動」と同時代に生きているのではないならば、そもそも我々がムスリム同胞団に対してかかる鋭い関心をもち、本稿のような論文を執筆することなどなかったであろうからである。ただし、紙幅の都合上、ここで指摘するのは、社会経済的背景を一切捨象した思想的歴史環境である。

さて、ムスリム同胞団現象の歴史環境と「イスラーム復興運動」台頭のそれとの間の類似性を一言で要約するならば、それまでエジプト政治をリードしてきた一つの時代を画する国民統合理念がその権威を失墜させたにもかかわらず、それに代わる新たな政治理念をみつけだせないでいるという思想の混迷状態である。ここで時代を画した国民統合理念とは、言うまでもなく、ムスリム同胞団現象については、1919年革命後ワフド党によって担われた国民統合理念であり、現在の「イスラーム復興運動」については、1952年のエジプト革命後のナセル体制によって担われた国民統合理念である。

つまり、両大戦間期、当時における農村部からの移住者増大による都市化現象のなか、都市部、とりわけ首都カイロは、住民の階層分化のさらなる進展とともに、まさに「大衆」社会の様相を呈するようになっていくが、そのなかで、1919年革命以降、政党議会政治のもとで、これら「大衆」の支持を獲得し、国民政党としてエジプト政治を一貫してリードしてきたワフド党は、1930年代に入るや、そしてとりわけ1936年の英・エジプト同盟条約以降、かつての権威を急速に失っていく。そして、その過程でエジプトの政局は、当時ワフド体制への批判者として登場し、以後エジプト政治において主導的役割を担うようになる、ムスリム同胞団、青年エジプト党、共産党、自

由将校団などの新興政治勢力が、ワフド党その他既成の政党とともに、エジプト政治のヘゲモニーを握らんがために、「大衆」の支持を獲得するために競い合う舞台となっていった。⁸¹

そして、この「大衆」獲得競争がどのような結果に終わったかについては、ここであえて述べるまでもないであろう。しかし、本稿のテーマと関連して、次の点だけは指摘しなければならない。つまり、それは、この未曾有の政局流動期において、「大衆」獲得手段として、さかんにイスラーム的価値への訴えかけがなされ、それがきわめて有効であった、という事実である。この点において、我々は、この両大戦間期の政局と現代のそれとの間に類似性をみないわけにはいかない。もっとも、前者の場合には、イスラーム的価値に対抗して、少なくとも表面的には非イスラーム的な政治理念、つまりナセル体制下の国民統合理念に収斂された世俗的政治理念を掲げ、「大衆」を組織し得る思想環境が残されていた。果たして、この非イスラーム的政治理念が危機に瀕している現代にあって、歴史は繰り返されるのであろうか？

[注]

- 1) ムハンマド・アルクーンは、「タクフィール・ワ・ヒジュラ」の研究者が、この運動を、その主張の厳しさやその行動性から、しばしば中世のハワーリジュ派やイスマール派、あるいは現代のムスリム同胞団の運動と比較対照してきたものの、彼らのイスラーム社会史に対する無知から、「フトゥッフ」、「アイヤールーン」、「アフダース」のようなイスラーム社会の特徴をよく示す民衆運動との比較を思いつくことはなかった、と指摘しているが、この指摘は、少なくとも私にとっては、その示唆するところ余りにも大きい、近年まれにみる重要な指摘であると思われる。M. アルクーン、L. ガルデ著、矢島文夫訳『イスラーム——過去と未来——』ヨルダン社、1987年、267頁。上記民衆運動については、とりあえず、以下の二つの文献を参照のこと。Cl. Cahen, "Mouvements populaires et autonomisme urbain dans l'Asie musulman du moyen age I - III," Arabica, Vol.5, 1958, Vol.6, 1959. 佐藤次高「バクダードの任侠・無頼集団」『社会史研究』3、1983年。
- 2) 例えば、以下のような文献を参照のこと。Sh. Ghorbal, The Beginnings of the Egyptian Question and the Rise of Mehemet Ali, London, 1928. M. Fu'ād Shukrī, Miṣr fī Maṭla' al-Qarn al-Tāsi' 'Ashar 1801-1811, Cairo, 1958.
- 3) G. Baer, "Submissiveness and Revolt of Fellah," in Studies in the Social History of Modern Egypt, The Univ. of Chicago Press, 1969. Do., "Fellah Rebellion in Egypt and the Fertile Crescent," in Fellah and Townsman in the Middle East, London, Frank Cass, 1982. なお、上記文献の詳細な解説、その他近代エジプトの農民反乱に関する情報については、アジア経済研究所での研究会等における長沢栄治氏の研究発表、および彼との個人的会話に負うところ大である。
- 4) オマル・マクラムのカイロ蜂起に先立つ、ナポレオン遠征時における反西欧イスラーム運動については、以下の文献を参照のこと。S. Girgis, The Predominance of the Islamic Tradition of Leadership in Egypt during Bonaparte's Expedition, Frankfurt/M., European University Papers, 1975. この文献では、小杉論文で論じられる、近代イスラーム政治運動におけるカリフ制の存在の重要性が強調されている。
- 5) F. H. Lawson, "Rural Revolt and Provincial Society in Egypt, 1820-1824,"

International Journal of Middle East Studies, 13, 1981.

- 6) オラービー運動の歴史的意義については、とりあえず以下の文献を参照のこと。拙稿「エジプト近代史研究動向——オラービー運動研究を題材として——」『オリエント』第27巻第2号、1985年、同「エジプト・オラービー運動に関する覚書」『歴史評論』No. 452, 1987年、12月。
- 7) 以上は、L. Binder, In a Moment of Enthusiasm — Political Power and the Second Stratum in Egypt —, The Univ. of Chicago Press, 1978にみられる指摘であるが、私は、バインダーのこの階層分析にほぼ全面的に賛同する。上記著作の内容については、拙稿「エジプト農村社会における村落有力者層—— Leonard Binderの Second Stratum 論をめぐって——」『オリエント』第24巻第2号、1982年を参照のこと。
- 8) この状況を板垣雄三氏は、次のように簡潔に、そして的確に要約している。「エジプトの戦後史のなかでの主導的政治勢力が、主体的立場をかためつつあったのが、まさに1930年代であった。」板垣雄三「エジプト史において1930年代がもつ意義」歴史学研究別冊『現代歴史学の課題』1963年3月所収。また、この時代におけるムスリム同胞団現象の意味については、以下の文献もまた参照のこと。中岡三益、板垣雄三「アラブ現代史の諸問題」『歴史学研究』No. 232, 1959年8月。